

国際共同研究交通費補助 研究成果報告書

(適宜行追加可)

所属・職・氏名	社会学部・教授・倉島 哲
共同研究者 所属・職・氏名	パリ・シテ大学・教授・Bernard ANDRIEU
研究課題	武術における内的感覚の知覚に関する学際的共同研究
共同研究 実施期間	派遣期間： 年 月 日 ～ 年 月 日 招聘期間： 2022 年 10 月 22 日 ～ 2022 年 11 月 7 日
共同研究 実施場所	大阪市・京都市

1. 研究の成果（本共同研究によって得られた新たな知見、成果等を簡潔に記述してください。該当しない場合は「該当なし」と記載してください。）

(1) 学術的価値（本研究により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果）

本研究は、武術の身体技法のパフォーマンスにおいて内的感覚の知覚が果たす役割を、哲学と社会学の学際的共同研究により解明した。具体的には、大阪(10月23日)および京都(10月30日)にて開催された武術練習会における参与観察とビデオ撮影およびインタビュー調査を行った。この練習会は、申請者がすでに参与観察を開始しラポールを形成しているため、本調査のスムーズな実施が可能となった。申請者およびアンドリュ教授の一方が練習に参加しているさいには、他方がビデオ撮影をすることで、主観および客観の双方から技法を捉えることができた。インタビューは個別の半構造化インタビューとして行い、アンドリュ教授が質問するさいは申請者が通訳を務めた。

(2) 相手国との交流（海外の研究者と学術交流することによって得られた効果）

研究対象である武術の練習会は、すでに申請者が参与観察を開始していたが、フランスの現象学的身体論との格闘を続けてきたアンドリュ教授の視点を導入することで、これまでにない角度からのインタビュー質問が可能になった。申請者がこれまでに焦点を当ててきたのは、当事者による意識的な技法上の工夫や、練習における感覚であった。それに対し、アンドリュ教授の提唱するエメルシオロジーでは、当事者が意識していないにもかかわらず生み出されてしまう不随意的な運動や無意識の動作を客観的な方法論によって捉えることで、当事者の意識とのズレを問題にする。このようなズレに対する当事者の認識のありようをインタビューで解明することができた。

(3) 社会貢献（社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献）

本共同研究は、スポーツに対するオルタナティブな身体活動を提案することで、我が国のスポーツ振興政策の偏りを指摘し、これを是正することを目指している。従来のスポーツ政策は、スポーツがもたらす勝利至上主義の問題性を認めているものの、これを原理的に克服するための方策を提示していない。アスリートたちは、勝つことを求めるあまり、自身の身体の変調や痛みを無視してしまい、結果として、各種のスポーツ障害や「燃え尽き」が帰結するのである。必要なのは、アスリートの一人ひとりが自身の内的感覚を敏感に感じ取ることを評価し、これを奨励するための制度づくりなのである。本共同研究は、武術交流会の調査を通して、こうした内的感覚の知覚のありようを解明し、スポーツにおいてもこれを制度的に可能にするための条件を探究した。

(4) 若手研究者養成への貢献 (若手研究者養成への取り組み、成果)

アンドリュウ教授の滞在期間をとおして、学内外の若手研究者と交流する場を数多く設けることができた。まず、本学社会学部において、アンドリュウ教授の研究発表を中心とする大学院生対象のセミナー(10月25日)を開催した。これに加え、大学院生たちの英語による研究発表を中心とするワークショップ(11月1日)を開催した。また、学部生を対象としたゼミ(10月28日、10月31日)でも、アンドリュウ教授に研究の概略をわかりやすく紹介していただいた。最後に、社会学部教職員の参加する社会学部研究会(11月2日)でもアンドリュウ教授に研究発表をしていただいた。

(5) 将来発展可能性 (本研究を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

申請者は2024年度の学院留学(2024年4月～2025年3月)が内定しており、アンドリュウ教授よりパリ・シテ大学での受け入れの内諾を得ている。この機会を活用して、フランスにおける武術実践についてフィールド調査を行い、本共同研究を発展させる予定である。また、申請者は2024年のパリ・オリンピックにあわせて開催される国際学術会議「D'autres jeux, d'autres corps (オルタナティブな競技、オルタナティブな身体)」の組織委員であるため、シンポジウムの企画立案を通して、本共同研究の成果を積極的に発信するとともに、武術に限らず身体パフォーマンス全般における内的知覚を解明するうえでの方法論的課題について問題提起を行いたい。

(6) その他 (上記 (1) ～ (5) 以外に得られた成果があれば記述してください。)

例：大学間協定の締結、他事業への展開、受賞、産業財産権の出願・取得等

2. 研究発表 (本共同研究の一環として発表 (予定含む) したものについて記述してください。なお、印刷物がある場合は1部添付してください。)

例：共著論文、口頭発表、出版、ポスター発表

学会活動としては、日本スポーツ社会学会国際交流員会および本学の共催により、公開セミナー「生ける身体とスポーツ社会学」を大阪梅田キャンパスで開催した(11月5日)。アンドリュウ教授には、「Feeling your living body: a new research method in sport studies (自身の生ける身体を感じること: スポーツ研究における新しい方法論)」というタイトルで研究発表をしていただいた。コメンテーターは、アンドリュウ教授の指導のもとで博士論文を提出した若手研究者、奥井遙准教授(同志社大学)に依頼した。コーディネーターと通訳は申請者がつとめた。

本共同研究の結果は、申請者とアンドリュウ教授の共著論文として、社会学的身体論の分野で第一線の国際学術雑誌であるBody & Societyに投稿する予定である。